校長室だより
NO.　１４
平成30年６月12日

すべては光る

梅園小学校長
たか　す　りょうへい
高　須　亮　平

梅園再発見２３　　～梅園小学校の校訓について探る

本校の校訓は「めあてを高く　できるまでやれ」です。本校は、この校訓を時代を超えて大切にし、教育目標として生かした教育を推進しています。それは、百年庭園のりっぱな校訓碑からも分かります。このような学校はあまり例がなく、近くの附属小学校くらいです。この校訓は、ずっと昔からのものかと言いますと、創立百周年（昭和４９・１９７４年）のときに簡潔に改められたということです。

石田利作校長

それでは、もともとの校訓はどのようであったかを遡（さかのぼ）りますと、大正末期から昭和初期の石田利作校長の在任期間（大正１３・１９２４～昭和５・１９３０）の教育とかかわりますので、まず、そのときの教育について触れます。その頃の本校の教育は先進的な考えのもとに、自学自習、自治会活動等がさかんに行われていました。文献の一部を紹介します。表現は現代的な言葉にしてあります。

「教育の徹底は、すべて児童の自発的意志に基づく自覚的行動でなければならないとの見解によって、学校は学級自治会、学校自治会を組織して平素、訓育（品性や人格を養うこと）、学習、衛生の各事項を児童の自発的協議によって、いっそう有効にしようとしている。学級自治会は尋常科4年以上の各学級で、学校自治会に提出する議題を協議し、学校自治会では、その事項2項目を選定して毎週月曜に議長は登校児童に報告し、掲示板に掲示していた。……」

自学自治の教育

この頃、本校では既に学級会や児童会での話し合い活動が進められていたことが分かり、子どもたちの自発的・自覚的な活動を育てようとしていました。また、勤倹教育として、毎朝の始業前、奉仕清掃をしていました。さらに、朝会学芸会、林間学芸会、供養の会学芸会、１～２月には普通の学芸会が開かれ、七夕祭りやひな祭りにも行われていました。学芸会は石山（現在の東門北）などで、唱歌、踊り、おとぎ話、朗読、劇が演じられていました。今で言う学芸会、音楽集会等の集会と思われます。その他、図画競技会、書き方競技会、珠算競技会が開かれ、全校で競い合っていました。現在の絵を描く会や書き初め大会が始まっていたのです。

このような先進的な教育の実践が認められ、本校は、昭和３年２月に愛知県知事より県下優良校表彰を受けています。その表彰状と功績の内容が文になっていますので、簡単にして紹介します。当時の教育を垣間見ることができます。

「表彰状　岡崎市梅園尋常高等小学校　職員和衷協同（心を同じくして共に力を合わせ）常に研究を怠らず各般の施設経営が適切で 教授 訓練 養護の成績が顕著であることを認める よって優勝旗1つを授与し ここにこれを表彰する　昭和3年2月11日　愛知県知事正四位勲三等小幡豊治」

「事蹟　本校は大正5年の創立に始まり、現在、学級22、職員数27、在籍児童数1042、各般の施設経

営が適切で教育上の成績は見るべきものが多い。教授の方面については、時代に照らして考えると、最近の教育学説の長所を取り、短所を補い、自学的態度を養い育てることことを方針として、教材の研究調査を周到にして、この取捨選択を間違わず、特別教室の設置、学級外専科、補助教員を増置して教授の徹底を図り、児童の学業成績は良好である。訓練の方面については、校訓「よき目あてを正しき仕方で出来るまでやれ」を方針として徹底的訓練を行うことに力を入れ、自治教育を高め、学理的研究と実際との根底との上に立って健実な努力を払い、その成績は見るべきものが多い。養護の方面については、常に体力を調査してこれを基礎として強健な体力を保持できるように努め、他面、衛生室の設置をはじめとして学校衛生の施設がよい。職員の勤務状況はよく、一致協力し誠実であり、常に研究を怠らず、一つのことに心を注ぎ、天職として献身的努力を払っていることは確かである。稀に見る美しい姿である。」

この「事蹟」を読みますと、当時の本校の教育は現在の教育にも通用する面を持っているなど、県から表彰を受けるにふさわしい学校ということが分かります。ここで、本題の「校訓」に戻ります。上の文（下線）に校訓「よき目あてを正しき仕方で出来るまでやれ」と記されています。この当時に校訓が存在していたことが分かり、現在と比べ、目標、方法が明確化されていて厳格な感じがします。そこで、１つの疑問が浮かびます。校訓の制定は、本校『百年記念誌』に昭和３年とありますが、この時点で既に教育に生かされていたようですので、制定となるとこの少し前であったのではないかということです。

校訓を記したはがき

そこで、さらに追究を進めますと、右の資料と出会いました。これは県からの表彰を記念して作られたはがきです。注目したいのは中央の書「出来ルマデヤレ 陸軍大将男爵土屋光春書」です。土屋光春（つちやみつはる）（嘉永元･1848～大正9・1920）とは明治から大正の岡崎出身の陸軍軍人で陸軍大将にまでなった人物です。明治政府の幹部は薩長が大半を占める中、岡崎出身者が大将になることは極めて稀（まれ）でした。そのためか三河の慰霊碑にもその名が多く刻まれています。また岡崎市名誉市民にもなっています。

土屋光春

土屋について、陸軍大将就任が明治43（1910）年、陸軍退役が大正４（1915）年、死亡が大正９年でした。それからすると、土屋がこの書を書いたのは石田校長の赴任前の、本校が高等小学校の頃になります。そうすると、この書が当時の本校に存在したことは、「出来ルマデヤレ」の言葉が高等小学校の頃から伝えられてきたと考えられます。そして、石田校長の頃に「よき目あてを正しき仕方で」が付け加えられ、それを校訓として先進的な教育を推進したことが推察できます。その後、昭和49（1974）年、現在の「めあてを高く できるまでやれ」になりました。校訓が100年以上も前の、誇り高き高等小学校の流れを汲むものであることが分かります。

石田利作先生については、私が附属小学校に勤めていたとき、附属小学校の「生活教育」を提唱した方ということで知っていました。それを文献から明らかにしたのは私だからです。そして、私が梅園小学校に赴任したときに、歴代校長として石田先生の名前を見ることになりました。石田先生からの梅園小学校の教育を受け継ぎ、時代は違いますが、同じ考えのもとで教育に当たれることを光栄に感じています。少しでも石田先生のような平成の梅園の教育ができるように努力したいと思っています。